哲 学 的 論 理 学

——思考について——

速 川 治 郎

Philosophische Logik

——Von Denken——

Jiro Hayakawa

Man bedarf der Kunstausdrücke, die ganz bestimmte und feste Bedeutungen haben, weil die natürliche Sprache unexakt ist. Aber wenn man so strenge Logiken erfindet, beruhen sie doch auf einzelnes Denken und Ich (Selbst), die sich mit ihnen beschäftigen. Man muß darüber reflektieren.

Nun werden logische Gedankenkonstruktionen mit Hilfe des abstrahierten calculus ratiocinator mitteilbar. Aber Hegel setzt sich solcher Denkweise entgegen. Denn er sucht neben einer gegenständlichen Logik eine subjektive, das Selbst enthaltende und reflektierende Logik unter. Im Denken, das sich auf diese gründet, bin “Ich” frei, weil der objektive Gegenstand in ungetrennter Einheit mein Selbstsein ist. Aber doch darf man keine mathematische (formale) Logik ignorieren, weil die logische Vernunft, die es mit einem Inhalt zu tun hat, nur durch die vernünftige Form vernünftig sein kann.

Das Denken in der philosophischen Logik ist total und streng. Das Totale ist dynamisches Element, das Strenge festes, und die Dynamik zwischen beiden ist die philosophische Logik.

言語表現をすることによって、思考が生ずるとは限らないが、思考にとって言語が必要であることは確かである。それだからこそ言語は危険な状態をひき起こす可能性を持っている。「人間は、事物の概念と名前を aeternae veritates (永遠の真理) として、長い間信じて来たことによって、自分が動物よりも高いとした誇りを身につけて」(F. Nietzsche: Von den ersten und letzten Dingen 11) いられるであらうか。人間は言語を持っているだけで、「世界の認識を持っている」

（上掲書）ことになるのであろうか。「言語は科学のための努力の第一段階」（上掲書）ではあろうが、しかし言語はそのまま真理を発見することにはならないのである。真理はたとえば鋳造された百円銀貨を無難作に受け取って、ポケットに入れておけば、それでよいというようなものではない。ある言語を語るだけでは、現実を十分に正しく理解したことにはならないのである。ここにおいて、厳密な知識を獲得するために、思考方法を問う必要があるのではないだろうか。また、思考は、一般法則に押し込むのではなくて、人間が実際に生きている状況から、出発すべきであるので、感覚、直観によって、あるいは、解釈学における理解に基づく推理によって、世界はわかるということをも検討する必要があるかもしれない。

論理実証主義にとっては、科学言語の基礎づけ、特に、この言語の構文論的規則が問題になっているわけだが、それに関して、P. ロレンツェンはO. ノイラートに基づく次のような比喩を使っている。「構文論的規則を持った言語は、われわれの乗っている一そうの船である。しかも、この場合、われわれは決して入港できないという条件がついている。船のあらゆる修理、改造は高波の上で行なわれなければならないのである。」（P. Lorenzen: *Methodisches Denken*, 1968 S. 27）思考的方法的絶対的始源を求めるためには、われわれが上陸するか、あるいは、そのような船を造船所のドックに入れなければならないのだが、しかし、先の条件により、それはできないのである。「一つの計算として表示可能でなければならない科学言語に、なるほど、意味論、すなわち、計算記号の解釈は帰属するが、しかし、いつも、すでにメタ言語と称する一つの言語が、先の意味論に役立っていないからではないであろう。実際に、その場合、メタ言語として、自然言語のうちの一つが働いているのである。」（上掲書 S. 28）また、人間が実際に生きている状況は、われわれが科学を研究するか、あるいは、哲学的思索を行なう以前に存在しているが、しかし、その状況の中で、構文論を問題にした自然言語を、すでに、われわれが利用しているとすれば、それは当然非難される。したがって、シュルツ的に言えば、普遍的真理を表現可能にする「基礎言語」の研究が必要であり、そのため、「具体的な学問を支配し得る公理体系を、計画にのっと

て創造しなければならないのである。」(H. Scholz: *Mathesis Universalis* 1961 S. 364)ただし、この場合、たとえば、フレーゲがブールの論理学を批判したように、論理の厳密化、正確化を目指していても、そのこと自体が異なった思考、異なった自我を基礎に置いていることを自覚していなければならないであろう。

ニーチェが「論理学は、現実世界の何ものにも相応しないような前提に基づいている。たとえば、幾つかの事物が相等しいとか、相異なる時点における同じ事物が同一であるという前提に基づいている。しかし、論理学は反対の信仰（つまり、そういうものが現実世界に確かにあるという信仰）によって成立した」(F. Nietzsche: *Von den ersten und letzten Dingen* 11)と言っているが、果してそうであろうか。思考方法を問題にするには、われわれは船、すなわち、言語から飛び出して、生という海の中で泳ぎながら、いかだか、あるいは、船を造らなければならないであろう。船と海とは同一ではない。しかも、論理法則は、現実そのものから引き離されたものとして、でてきたものであるから、ニーチェの批判は妥当ではない。論理法則が現実世界と同一であるとか、ないとかという安易な二者択一ではなくて、問題はむしろ別のところにある。論理法則を使用しようが、しまいが、すでに生の真只中で日常言語を使用している。だがしかし、いや、それゆえにこそ、科学言語、厳密な思考を始めから体系的に作り上げなければならないのである。心理的な場でもある日常言語は不完全であるから、客観的内容を理解するためには、思考を日常言語の枷から解放しなければならない。しかし、論理的構造が言語から、まったく、断絶してしまっているとは言えない。やはり言語は必要なのである。ただし、それは、かなり自由で、自立的な意味を展開する日常言語ではなくて、論理的な思想構造を伝達しうる記号を、端的に与えるようなものでなければならない。このことはライプニッツの *calculus ratiocinator* (推論計算), *characteristica universalis* (普遍的記号法)に通ずる。フレーゲはライプニッツの思考態度として、*Si daretur vel lingua quaedam exacta, vel genus scripturae vere philosophiae, ...omnia quae ex datis ratione assequi, inveniri possent quodam genere calculi, perinde ac resolvuntur problemata arithmetica aut geometrica.* (G. Frege: *Nachgelassene Schriften*

1969 S.10 以下 N. S. と略記する。) (もし、ある種の完全な言語、あるいは、真に哲学の語法が与えられたならば、所与のもののうち、理性によって理解されるすべてのものは、算術ないし幾何の問題を解くのと同じように、ある種の計算によって、理解できる。) という文をあげている。しかし、ヘーゲルはそのような態度には強く反対している。プルーケが *Posse etiam rudes mechanice totam logicam doceri, uti pueri arithmetica docentur, ita quidem, ut nulla formidine in ratiociniis suis errandi torqueri, vel fallaciis circumveniri possint, si in calculo non errant.* (G. W. F. Hegel: *Wissenschaft der Logik* 2. Teil Herausg. v. G. Lasson 1934 S.333 以下 W. L. と略記する。) (初心者でさえも、ちょうど子供たちが算術を学ぶように、全論理学を機械的に学ぶことができる。しかも、もし計算に間違いがなければ、その種々の推理を間違ふ恐れはまったくなく、また、誤謬に陥ることもありえない) と言ったことにも反対して、ヘーゲルは「この計算によって、初心者たちにも全論理学を機械的に教え込めるという賞賛こそ、恐らく、論理学の敘述上の発明について言われうるものの中で、最悪のものであろう」(W. L. S.333) とまで言っているのである。しかし、形式論理学史上、プルーケを思い起こさせるに足る事柄はある。なぜならば、 $\vdash MaP \wedge SaM \rightarrow SoP$ および換言法則 $\vdash SoP \leftrightarrow PoS$ を彼が考えていたからである。(A. Menne による指摘) それはそれとして、ヘーゲルにおいては、「理性的なものが死んだ没概念的なものと見なされていること、そして、精神的存在として、問題とするものに關係するものであり、また、この關係によって、その精神的存在の直接的規定を止揚するものである概念と概念諸規定との特性が除去されていること」(W. L. S.332) は不当なのである。彼は局限した中での正当性を求めるのではなく、全体的なもの、理性的なものを追求する。このことは、たとえば、A. ゲーレンの人間学において、それは個別科学の材料を使用するが、個別科学の境界を越えて、人間というものの全体、いわば人間の総合科学であるとゲーレンが考えている点に類似している。ヘーゲルにおいて、思考は他者からその他者へと移動するだけでは、全体的把握にはならない。「それはその先行する内容の全部をそれ以上突っ込んだ規定のある次の段階に高めるが、その弁証法的進行に

よって何ものをも失わず、また、何ものをもあとに残さないのみでなく、獲得したすべてのものを携行しており、思考自身の中で自身を豊かにし、密にする。」(W. L. S. 502) この考えは対象的論理においては問題にされないであろう。その論理への自我の介入、あるいは哲学的思索をする「私」がその論理へ常に繰り入れられていることを反省するところからでてくる。客体について行なわれる肯定的、対象的、客観的立言と一致しない否定的、反照的立言は形式化できるのである。古典的論理学では $1 \longleftrightarrow 2$ (1: 肯定, 2: 否定, $\longleftrightarrow$: 相互交換関係) があり、この拡張は $1 \longleftrightarrow 2 \longleftrightarrow 3$ である。G. ギュンターにおいては、これとは別に $1 \longleftrightarrow 2 \longleftrightarrow 3$ が示され、それによって、否定である2と3との相互的交換関係が考えられている。これがヘーゲルの「否定の否定」であり、 $2 \longleftrightarrow 3$ はすべての一般的な反照構造を持った論理学と言えるが、そこには解釈の変革があり、思考における「私」の自由がある。「なぜならば、私は他者のうちにあるのではなくて、端的に私自身のもとに止まり、私にとって実在である対象は、私の私だけの存在と不可分の統一においてあるからである。」(G. W. F. Hegel: *Phänomenologie des Geistes* Herausg. v. J. Hoffmeister 5. Aufl. 1949 S.152) このことは「情報を消化する体系それ自体（それが人間であれ、オートマトンであれ）にとって、一定の出来事は主観的、心理的体験として現象する。これと全く同一の出来事が、観察者にとって、物理学の言語で記述され得るものとして、外から現象する。しかし、この二つの現象は同一である」(K. Steinbuch: *Automat und Mensch* 1965 S.12) という考えの一つの現われであり、また逆に、その考えがヘーゲルの思考方法の一つの現われである。しかし、ヘーゲルの思想が科学の内容を常に適確に把握していたとは、もちろん、言えないし、また、たとえば、G. クラウスが「弁証法的矛盾は形式的にはゲームという概念になる」(G. Klaus: *Spieltheorie in philosophischer Sicht* 1968 S.33) と言っているような数学的思考を含んだ態度は、ヘーゲルにはない。ヘーゲル自身は形式的、機械的計算を批判しているが、これに反して、フレーゲは哲学に批判の矢を向けている。彼によると「命題の思想内容は本来的には数学者に少しも関連せず、それは哲学者達の事柄であると考えられるかもしれないが、すべての哲学的なものは、全く不正確、不確実であ

り、もともと非科学的である。科学的な声を重んずる数学者は、そのような哲学的なものを取り扱いはしないのである。」(N. S. S. 233) 哲学は科学それ自体ではないと、しばしば言われるので、「非科学的」という語は哲学に対する非難には必ずしもなりえないが、不正確、不確実という点は、哲学の側からは反省する必要がある。もっとも、哲学にとって根源的なものは、誠実であると言う人もいるが、しかし、不正確、不確実な表現でよいということにはならない。確実に、正確な思考を遵守するためには、フレーゲは哲学的な病気にかかってはいけないと言っているが、しかし、哲学そのものから全く離れてしまえとは言っていない。「哲学的素質を持たない数学者は半分数学者であるにすぎない」(N. S. S. 293)とも言っているからである。それにしても、先述の思考を表現するためには、「全く規定された、そして固定した意味を持つ人工表現」(N. S. S. 224)が必要なのである。そうすると、それに区別を立て、差違をつけることになるが、そこで「差違はむしろ事柄の限界であり、事柄が終るところにある。換言すれば、差違は事柄ではないものである」(G. W. F. Hegel: Phä. d. Gei. S. 11)と言えるであろうか。固定した人工表現はそれ自体限界であり、それ以外のものではないが、それだからこそ現実的事柄ではないのである。そして、このような人工表現に引き上げることそのことは、必要である。事柄の本質を把握するためには、事柄から離れなければならない。このことによって、事柄にせまるのである。フレーゲはそのために数学と論理学との関連を追求したと言ってもよいであろう。思考における推理、定義づけが数学者の活動に最も必要であるから、「数学は他の科学よりも一層論理学と結合している。」(N. S. S. 219)「科学には、とにかく証明すべきものを証明する必要がある、証明できないあるものに突き当たるまでは、静止しない必要がある。科学は証明できない根源的真理 (Urwahrheiten) をできるだけせばめるよう努力しなければならない。なぜならば、数学全体は、萌芽の中と同じように、その根源的真理の中に含まれているからである。この場合、数学全体をこの萌芽から発展させることだけが問題なのである。数学の本質はこの萌芽によって規定されているはずである。そこで、その根源的真理に通暁しなければ、数学が本来的に何であることを明白にできないであろう。その根源的

真理を幸いにも見出せて、それから数学が発展されると仮定するならば、数学は、論理的推理によって相互に結合している諸真理の体系として、提示される。](N. S. S. 221) 論理的推理を行なう場合、日常言語は不適當であるから、人工表現を必要とするわけであるが、しかし、その意味を了解させ、できるだけ誤解を避けるために、説明しなければならない。そうすれば、日常言語が再び使われ、欠陥が現われ、新しい説明がまた必要になってくる。「そこで理論的には、科学的目的には達しないということになるだろうが、実際には日常言語の意味を十分に了解させることはできる。この場合、相手が理解して快く受け入れ、当面の事柄を推測、察知してくれうる態度が前提されていなければならない。」(N. S. S. 224) このことは、フレーゲにおいては、論理学体系の構成に先行するが、体系内には入らないと考えられている。しかしながら、二人の間の対話の論理をも考えることはできる。そのような二人の主張をP. ロレンツェンは一つの表にしている。右側に弁護人Dの主張、左側に反駁人Oの主張が形式化されて、素論理式という形で記載される。ロレンツェンは、ここで素論理式を擁護するには一定の特別な知識内容を必要とするが、形式論理学では、全くそれを無視しようと言っている。しかし、そこに自然言語がおのずから入ってしまっているから、それはまさに知識内容であり、この内容はまた形式化に移行されうる。このような流動性を防止することはできるが、その時には全体の個別化、孤立化が直ちに現われてしまう。また、先の素論理式が形式であると主張すると、それには内容が浸透してしまっていることも確かである。彼が「哲学は、科学を超越する限り、命題でなく、哲学する人間そのものを目的としているが、…しかし、このことは、その目的について語られているすべてのものが、基礎づけ可能であるか、どうかの吟味を、人間自身が学ぶことによってこそできるのである」と言っているが、そのような人間は、限界づけることを超越し、肯定することを否定していく態度を持ち、論理形式を肯定しながら、その批判的否定を考え、そして、その形式の自覚的、反照的、反折的肯定を持つことによって、否定の論理が現われる。科学を超越しながら、科学に基礎を置く論理がその中にあるのではないだろうか。

Oの仮定は(1)行目と(2)行目にあり、Dのテーゼは(2)行目にある。さてOが(3)行

行数	O	D
(1)	$a \vee b$	
(2)	$\neg a$	b
(3)	?(2)	(1)?
(4)	a	(2)? a
(5)	?(4)	(4)?

目において、(2)行目の素論理式 b を攻撃することから議論が始まる。その攻撃は?(2)で表わされる。Dはそれに応答して、(1)行目にある仮定を攻撃する。これは(3)行目に(1)?で表わされる。Oは(4)行目に移り、 b でもって弁

護することもできるが、そうすれば、Dはそれを非難して、勝つことができる。そこでOは a でもって弁護する。Dは(2)?でもって、(2)行目にある仮定を攻撃する。この場合、D自身は一応 a を主張しなければならない。ところでOは、どの式も一度しか攻撃できない。したがって、ここでは、攻撃?(2)の繰返しはできないし、また、それによって素論理式 b の弁護を主張しえない。そこで、Oは(5)行目において、素論理式 a を?(4)という記号で攻撃する。しかし、Dは(4)における a を攻撃して勝つことになる。

行数	O	D
(1)	$a \vee \neg a$	
(2)	$\neg \neg a$	a
(3)	?(2)	(1)?
(4)	$\neg a$	(2)? $\neg a$
(5)	a ?(4)	(4)? a
(6)	?(5)	(5)?

(I)

行数	O	D
(1)	$\wedge x a(x) \vee \neg a(x)$	
(2)	$\wedge x \neg \neg a(x)$	$\neg \neg \wedge x a(x)$
(3)	$\neg \wedge x a(x)$?(2)	(3)? $\wedge x a(x)$
(4)	y ?(3)	(1) y ?
(5)	$a(y) \vee \neg a(y)$	(5)?
(6)	$\neg a(y)$	(2) y ?
(7)	$\neg \neg a(y)$	(7)? $\neg a(y)$
(8)	$a(y)$?(7)	(6)? $a(y)$
(9)	?(8)	(8)?

(II)

(I)、(II)の場合には、Dが勝つことになる。しかも、DはOのどの策略に対しても勝ちうる。しかし、この二つの場合、仮定において、特殊なものである排中律を採用しているがゆえに、勝ちうるのである。IIIは、パースの立

行数	O	D
(1)		$a \rightarrow b \rightarrow a \leftrightarrow a$
(2)	$a \rightarrow b \rightarrow a$?(1)	a
(3)	?(2)	(2)? $a \rightarrow b$
(4)	a ?(3)	b
(5)	?(4)	

(III)

言が有効論理的には真ではないことを示している。なぜなら、Dは最終的勝利となりえないからである。以上のように対話が論理的に検討されているが、このことは、論理的構造が自然言語の中で理解されるためには、その構造を自然言語の外に投げ出さなければならないという哲学的態度から出てきているのであり、単なる常識的な形式性、区分性があるのではない。しかし、往々にして、それらが不当な現実無視にとられるので、ヘーゲルの思考が出現したとみなされないこともない。「形式的な思考は同一性を自分の法則となし、その思考が直面している矛盾的な内容を表象の領域に、つまり、空間と時間の中に引き下ろす。それゆえに、ここでは、矛盾するものも互いに分離されて、並置と継起という状態におかれることになり、そこで、反対し合う関連を持たずに、意識の前に現われるのである。そのために形式的思考は、この関連に関して、矛盾は思考しえないものだという一定の原則を作るのである。しかし、実際には、矛盾の思考は概念の本質的契機である。形式的思考も事実矛盾を思考するのであるが、直ちに矛盾から目をそらし、…抽象的否定に移行してしまう。」(W. L. S. 496)ヘーゲル的には、形式的同一性は抽象的悟性-同一性、単なる同語反覆であるから、そのままでは、具体的同一性にならない。そこで、ヘーゲルは、具体的同一性がなぜ絶対的非同一性であるかを述べるが、これに対する反論として、ヘーゲルは意味論的段階を混同しているという考えがある。つまり、区別を具体的同一性として、これが非同一性であるとヘーゲルは考えている。その区別は自己同一とみなされる。すなわち、区別というこのタイプが現われるところではどこでも、その区別は同一のタイプと見なされうるし、同一の表現によって示されうる。ヘーゲルはこの表現およびタイプの同一性をあやまって一般的に具体的反照の同一性と同一視している。すなわち、区別は区別自身であり、そこで同一性であると彼は言う。このことから、具体的同一性は絶対的非同一性であると推論されるのである。この思考が不適當であるとするわけであるが、このことの前提には区別化、分離化、固定化があり、これらを是認する限り、先述のヘーゲル批判は正当であろう。しかし、区別化が区別化たりうるのか、それ以外のものではないのか、それ以外のものにならないのか、これらの点に関して考える必要があろう。

ヘーゲルにおいて、同一性は $A=A$ 全体であり、 $A=A$ 全体ではないから、同一性は一つの差違的なものであるとするなら、それは概念の混乱を示すものと考えられるであろう。しかし、ヘーゲルはなぜこのような表現をしなければならなかったのであろうか。また、概念の混乱と言った時、そこには当然混乱とみなすべき前提がある。しかも、その前提を把握し、語る自我(自己)の実在がなければならぬのである。そういう形態でしか人間は語れないし、考えられないのである。 $A=A$ は $A=A$ である、では同一性の意味を語っていることにはならない。 A は B ではないという差違性全体が理解されていて始めて、 $A=A$ は理解できるのである。つまり、「純粹に同一なる判断 $A=A$ の意味に、その判断の各文肢の非同一次性が帰属するのである。」(T. W. Adorno: Drei Studien zu Hegel 1963 S. 151) 同一性は $A=A$ ではないのではない、 $A=A$ 以外の何ものでもないと考ええるようになったときには、対象的存在にすぎなかった同一性から離れて、動いてしまっている。同一性は対象的、客観的 $A=A$ 全体であるが、そのものとして十分に積極的に考えた自我の思考内容であり、それを自覚反省することによって、対象的、客観的 $A=A$ 全体ではなくなって来ている。しかし形式的表現としては $A=A$ としか記述されていないのである。この場合、自我は消極的、否定的にしか現われていない、いや、その限りで現われていないのである。このようにして、「同一性は自己自身への反照である。ただし、このことは内的反撥としてのみ自己自身への反照であり、そして、この反撥は自己への反照、つまり、自己を直ちに自己へ取り戻す反撥として内的反撥なのである。」(W. L. S. 27) $A=A$ は左の A が右の A と相違しているから同一であり、その限りで、右の A は左の A に反照し、また逆でもある。しかし、左の A は右の A に反撥しているから、 $A=A$ もある。 $A=A$ は思考する主体に把握理解され、媒介される限りにおいて、 $A=A$ に反照しているのであり、直接的な $A=A$ は、媒介された $A=A$ と反撥しながら、直接的な $A=A$ 自身へ反照しているのである。この点から、G. ギュンターのように、アリストテレス論理学と反アリストテレス論理学が考えられるであろう。アリストテレス論理学は対象論理学であり、主体のない論理学と言えるであろう。これに対して、ある対象が存在するということは、そこに主体が記述さ

れていないのにもかかわらず、主体が現われている。そういう形で、対象論理学の自己批判であるとも言える。ここに反アリストテレス論理学がありうる。ヘーゲルにおいては「意識は、物に取りつかれた素朴な意識の直接的な循環（フィード・バック）を必然的に再び通過するが、しかし、それは同時に、初回と同じ仕方ではない。すなわち、意識は単純な純粹把握でなく、その把握をしていながら、同時に、真なるものから意識自身へと反照（還帰）している知覚についての経験をしたのである。」(G. W. F. Hegel: Phä. d. Gei. S.94) 自己への反照が真なるものを変えるようになる。真なるものは、1. 直接性の形態、したがって、意識に対する純粹な彼岸であり、フレーゲの真なるものもそのような彼岸である。これに対して、2. 「意識はこの真なるものを対象的な内なるものとして、物のこの反照（還帰）を、真なるものの自己自身への反照（還帰）から区別する。」(G. W. F. Hegel: Phä. d. Gei. S. 111) 1 がアリストテレス論理学であり、2 が反アリストテレス論理学となるであろう。ヘーゲルは超感覚的世界という言葉で人間を超越した世界を考え、それは、諸法則の静かな王国であり、知覚される世界の彼岸ではあるが、しかし、この知覚される世界のうちにも現在する。超感覚的世界は直接に、つまり、自我が媒介されていながら、無媒介的に模写された静かな像である。ここでは、第一に「現象する世界」、第二に「法則の静止した領域内で、その世界を模写した不動の像」である。

以上の点には媒介が重要な役割を演じている。「直接知、すなわち、無媒介的知、つまり、他者としてあれ、あるいは、知自身の中で、自身としてあれ、無媒介的知があるということは、偽」(G. W. F. Hegel: Encyclopädie § 75) だからである。また「思考は、他者によって媒介された諸規定、すなわち、有限的な、制約された諸規定に即してのみ進んで行くということ、および、媒介のうちで、媒介そのものが自身を止揚しないということも、事実上真理でなかったのである。一面的な直接性のうちを進むのもなければ、一面的な媒介のうちを進むのもないような認識作用の事実を示した例が、論理学そのもの、全体的哲学である。」(上掲書) この段階において、真の存在が示されるのであるが、これは与えられた直接性の上に基礎を置く媒介でなくて、媒介に基づく媒介である。したがって媒介に

かかわる媒介、あるいは、反照の媒介である。このことを考えるのは理性であるが、これは形式から離れているのではない。「論理的理性が形式的理性とみなされる場合、その論理的理性とみなされる場合、その論理的理性は明らかに内容を取り扱う理性においても認められなければならない。いやむしろ、すべてこの内容は、理性的形式によってのみ、理性的でありうる。」(W. L. S. 309) このような形式はいかなるものであろうか。G. ギュンターのように、それは記号論理学にのっとった反照問題として提示できるであろう。それは次のようになる。

・ 体系 I R によって表わされる非反照

体系 R D によって表わされる一重反照

体系 I D によって表わされる二重反照

思考が高次の反照水準へ進むと、I（非反照）、R（反照）、D（二重反照）という個々の値の相互関係を問題にするのではなくて、上述のような2値体系の相互関係なのである。したがって、非反照は単なる一個のIではなくて、IとRとの全体的交換関係である。客観的存在である「それ」(ある物)の超古典的な概念は、非反照(存在)と過程(反照)との同一であり、このことが実はサイバネティックスの認識論的前提なのである。人工頭脳の理論は、人間の自己意識そのものが機械装置へ繰り入れられると言っていないが、自我でも、他自我でもない客観的存在の中に、反応形式と法則性、換言すれば、反照過程が現われていると言っている。この点が「ある物」をIとRという二値的体系として定義づけることを可能にしている。したがって、自然法則も非反照的には客観的な出来事として、反照的には意識機能として、現われるようになってくるのである。そこで、たとえば、 $p \wedge q$, $p \vee q$ という関数は次頁にあるような表で示しうる。

ヘーゲルの大論理学は I/R/D 言語によって記述され、ここでは思考と存在とか必然的に一致するのである。ギュンターの考えでは、総体的な思考、立言の主観、換言すれば、I/R/D の主観は絶対的主観、すなわち、「自我」、「他我」、「ある物」の同一であり、したがって、少なくとも、四値論理学を考える必要があり、その論理学の四番目の値は絶対的同一を表わすのである。ここには、形式的に閉ざされるとともに、すべての存在者に開かれる思考の自覚があると思われる。そ

p	q	p $\wedge$ q	非反照的体系： I/R	一重反照的体系： R/D	二重反照的体系： I/D	I/R/D
I	I	I	I	—	I	I
I	R	R	R	—	—	—
I	D	I	—	—	I	—
R	I	R	R	—	—	—
R	R	R	R	R	—	—
R	D	D	—	—	—	—
D	I	I	—	D	I	—
D	R	D	—	D	—	—
D	D	D	—	D	D	D

p	q	p $\vee$ q	非反照的体系： I/R	一重反照的体系： R/D	二重反照的体系： I/D	I/R/D
I	I	I	I	—	I	I
I	R	I	I	—	—	—
I	D	D	—	—	D	—
R	I	I	I	—	—	—
R	R	R	R	R	—	—
R	D	R	—	R	—	—
D	I	D	—	—	D	—
D	R	R	—	R	—	—
D	D	D	—	D	D	D

して、そういう形で非合理的でもある現実の自我自身の自己反省、自己批判が繰り入れられてしまっているであろう。

ゲーテの「ファウスト」の中で、メフィストは学生に向けて、「君に忠告をするのだが、／まず論理学の講義を聞くように。／すると、君の精神は十分に訓練され／スペインの長靴（一種の拷問具）でぎゅうぎゅう締めつけられる。／その結果、君の精神は今後慎重に／思想の道を除々に進むようになるのだ。…」と言っている。この限りでは、そこには閉ざされた思考があるだけであると思われるが、それゆえにこそ、開かれた思考が、無自覚的にであれ、求められ、論理学の発展へとつながることになるのである。開かれた思考、哲学を自覚して取り扱った人として、たとえば、F. ゴンセットがいる。彼はそこにおいて、1. 改正、2. 二元性、3. 技術性、4. 関連（総合）の諸原理をあげている。1. は法則の改正を

問題にし、2.は理論と実験との相互依存を考え、3.は限定された状況の中での認識の進歩が、そこに実現される技術水準の関数である点を問題にし、4.は得られた認識の全体が、連帯性を形成すると言うのである。そして、上述の四つの原理の総合化が開かれた方法論なのである。また、これは次の四つの様相の手続きを整理するものでもある。すなわち、第一の様相では、問題を自由に措定、陳述し、第二の様相では是認しうる仮定の研究と公式化を目指し、第三の様相では、その仮定を種々試験してみるため、先例にとらわれない実験装置を使用するのである。第二と第三の様相には二元性の原理が働いている。第四の様相では、第二と第三との様相から得られた成果を利用しながら、第一の様相へ還帰するのであるが、ここに改正の原理が入ってくる。要するに、ゴンセットにとって、開かれた思考は、ヘーゲルとは異なっているが、弁証法的な場を必要としているのである。

哲学的論理学における思考は、a) 哲学的である限り、全体的、総体的であり、開示されていなければならないが、b) 論理学である限り、厳密、正確でなければならない、a) はいわば動的エレメントであり、b) は静的エレメントであり、この両者の動態が哲学的論理学であろう。これは創造的思考に基因する。この思考は、非同一的なものの同一性、すなわち、自分の中で非同一であったものを媒介にして同一となったものとしての総体性の実現であろう。

筆者紹介：

1928年に生まれる。1955年早稲田大学文学部西洋哲学科卒業。1960年同大学大学院博士課程修了。現在、早稲田大学講師。

主要訳書論文：

グロックナー『ヨーロッパの哲学』（共訳）、「存在についての一考察」（『フィロソフィア』43号）、「三段値論理学への道」（『フィロソフィア』53号）